

「占卜と万葉の歌」

中村素堂

このごろはもう忘れられたかも知れないが、紛失したものなどがあつた時、その行方を探すのに水天宮のお札という小型の紙片を皿のようなものに盛った浄水に浮べて、その皿の水をかきまわし、お札の寄り着いた方角を探せば出ると決める一種の神占があつた。また四国の足摺岬の海岸の砂の中から拾つた螺の小さい蓋をやはり皿に酢を入れて、それに浮べてその皿の縁により着いた方を尋ねるという弘法大師信仰からんだ仏占の一種もあつた。

『万葉集』の中にある水占というのは、  
妹にあはず久しくなりぬ饒石川よき瀬ごとく水占はへてな  
(四〇二八)

のような大伴家持の例歌があり、彼が富山県永見の任地にて、自分の管轄地を出挙のために旅行している途中の作であるが、これも前述のお札や貝の蓋の例のように、河へ何か流してそれが流れてしまふか、または岸か杭などに漂着して来るかを見て占つたものではあるまいか。伴信友は繩を流れにかけて渡して、それに懸つた物の数で占つたかといっているが、あるいはそんなことかも知れない。これはやはりそうな、そして今でもちよつと類型のものがありそうに思える方法である。

このほかに、どうもやり方の考えられない石占とか苗占とかいうのがある。あるいは石占は石を抛つて占うのではないかとも思うが、西村博士はたしか石の上に石を立てて、その倒れ方で占うのだといつておられたと思う。また苗占な

どは例歌として出てくる歌が、  
上毛野佐野田の苗の群苗にことはさだめつ今はいかにせも  
(三四一八)

というのだから、これは苗占というものがあつたのではなくて、うらなえをもじつたのではないかとも思う。苦しまぎれに洒落てしまつたような話だけれど、ほかにもこんな例はあることではある。縁起ものという物売る店や、旧暦の暦など売つてる店に、よく夢判断という本を見かけた。これはちよつと読み始めると、妙に気になることが書いてあつて、随分むずかしい顔をした学究的な紳士淑女でも、バカにしながら、見始めているうちにだんだん真剣になつて読んでいるからちよつとおかしくなる。

ある時、尾崎行雄氏がすいている二等車の中で、旅のつれづれでもあろうか、これを例の八字ひげを捻り捻り、鼻眼鏡でむずかしい顔をして読んでいたことがあつた。これは身近なところに経験した夢がたくさん例に引かれていて、それが吉だとか凶だとかいわれるので、人間の弱味が引つかかるようになっていたためであろう。(つづく)

〔たかむら〕昭和五十七年

山房春日

昭和壬申  
春玉正月

閒中無箇事 客去復臨書  
笑對梅花坐 春風滿岬廬

貞香山房詩鈔「山房春日」